平成２２年度全国高等学校総合体育大会【美ら島沖縄総体２０１０】
(第７８回　日本高等学校選手権水泳競技大会)

水 球 競 技 速 報 用 紙

平 成 22 年 8 月 20 日 (第 4 日)
会場:　プ　ー　ル

ｹﾞｰﾑ№ **20**

決勝戦

2	-	2
0	-	1
2	-	0
1	-	2
EX.		
0	-	0
2	-	1
P. T.		
-		

帽子の色　白
福岡県立福岡工業高等学校
7

青　帽子の色
山形県立山形工業高等学校
6

天候:　晴れ

審判1:　大島　明
審判2:　折笠　敬一

戦　評

2010年高校日本一を決める戦い。13年ぶりの決勝進出となる白:福岡工は、ここまで3試合の激戦を勝ち抜いてきた。対する青:山形工は2003年(長崎IH)以来7年ぶりの決勝進出、優勝候補と予想されていた相手たちとの戦いを僅差でものにして勝ち上がってきた。両ﾁｰﾑともにｼﾞｭﾆｱ期から名の通った選手が多く、熱戦が期待される。

１Ｐ　山形工の先攻で開始。先制したのは福岡工、ｷｬﾌﾟﾃﾝ②深川将平がｶｯﾄｲﾝﾌﾟﾚｰで退水を誘発、ｾｯﾄｵﾌｪﾝｽで自身が決める。両校ともに攻守のｽﾀｲﾙは同じ。攻めはゆっくりとｾｯﾄを張り、泳ぎ込みはなく、ﾌﾛｰﾀｰにﾎﾞｰﾙを落とすことを狙っている。守りはそれをさせまいと、高い位置の選手にはﾊｰﾄﾞなﾌﾟﾚｯｼｬｰ与えず、中を警戒。それぞれにこれまで見せてきたｶｳﾝﾀｰは見られない、上手にお互いの攻撃の芽を打ち消しあっていて、構えてからのﾐﾄﾞﾙｼｭｰﾄを打ち合う展開。3:37、ようやくｾﾝﾀｰへﾎﾞｰﾙを落とすことができた山形工の攻め、②志田がﾌﾛｰﾀｰｼｭｰﾄを決める。2:03、下がり気味でﾁｪｯｸに来ない山形工ﾃﾞｨﾌｪﾝｽに対して、福岡工⑩石井がﾐﾄﾞﾙｼｭｰﾄを決めた。0:41、山形工、退水のｾｯﾄｵﾌｪﾝｽで⑥近野が斜め後ろからのﾊﾟｽに鋭く反応し、ﾜﾝﾀｯﾁｼｭｰﾄを決める。一進一退の攻防、連続得点はなく、2－2、同点で終了。

２Ｐ　山形工、福岡工ともに攻守のｽﾀｲﾙは大きく変わらない。5:04、山形工④高橋がｶｯﾄｲﾝﾌﾟﾚｰからﾜﾝﾀｯﾁｼｭｰﾄを決める、ｷｰﾊﾟｰの体勢ををよく見たﾊﾞｳﾝﾄﾞｼｭｰﾄ。山形工1点ﾘｰﾄﾞ。3:44、福岡工が追いつくﾁｬﾝｽ、しかしｼｭｰﾀｰと正対しつつも山形工ｷｬﾌﾟﾃﾝGK①木村がｽｰﾊﾟｰｾｰﾌﾞでしのぐ。この後はどちらにも決定的なﾁｬﾝｽは訪れず山形工1点ﾘｰﾄﾞのまま前半終了。

３Ｐ　開始まもなく福岡工に退水ｵﾌｪﾝｽのﾁｬﾝｽ、5:57、⑥浦山が得点。3－3の同点。山形工も早い段階で差をつけたいところだが、動きの中からのｼｭｰﾄﾁｬﾝｽを作れず、個人技に頼るﾌﾟﾚｰも不発に終わる。福岡工は攻めに変化、相手が下がるぶん間をつめるようになった。そのことでｼｭｰﾄﾁｬﾝｽが生まれようになる。お互いに決め手を欠く時間が長く続くが、前がかりになる福岡工は相手陣内の深くまでﾎﾞｰﾙを運ぶようになり、1:21、左2mｻｲﾄﾞからｺﾞｰﾙ前へ平行なｾﾝﾀﾘﾝｸﾞﾊﾟｽ、このﾎﾞｰﾙを②深川将平がﾀｯﾌﾟｼｭｰﾄで得点。福岡工がﾘｰﾄﾞを奪い返す。このﾋﾟﾘｵﾄﾞでのｼｭｰﾄ数は両ﾁｰﾑとも同じであったが、山形工のｼｭｰﾄは精度を欠いた。

４Ｐ　1点差、次の1点の行方が気になる緊迫の展開。ﾘｰﾄﾞしている福岡工は、全員がﾎﾞｰﾙに良く集中して守り、動きのある攻めを展開する。追いかける山形工は⑥近野のﾌﾛｰﾀｰﾌﾟﾚｰや⑤新山、⑦羽角のｶｯﾄｲﾝなど個人技を生かして攻め、ﾏﾝﾂｰﾏﾝ, ﾌｧｰﾙﾃﾞｨﾌｪﾝｽで速攻のﾁｬﾝｽを伺う。長いﾗﾘｰの末に得点をしたのは山形工、2:35⑤新山のﾐﾄﾞﾙｼｭｰﾄがようやく決まり、4－4同点。第4ﾋﾟﾘｵﾄﾞのこの時間帯で次の1点が大きい。残り2分を切ったところで山形工のｺｰﾅｰｽﾛｰ、ｺﾞｰﾙ前で福岡工の選手がﾏｰｸﾁｪﾝｼﾞをする一瞬、ﾌﾘｰになった山形工⑥近野へ直接ｺｰﾅｰｽﾛｰのﾎﾞｰﾙが届く、1:53、山形工の再逆転弾がｺﾞｰﾙﾈｯﾄを揺らす。この後、両ﾁｰﾑ1回ずつ退水ｵﾌｪﾝｽのﾁｬﾝｽが訪れ、それぞれﾀｲﾑｱｳﾄﾌﾟﾚｰを仕掛けるが得手ならず。このまま山形工逃げ切るかと思われたが、下がる山形工ﾃﾞｨﾌｪﾝｽに、0:28、福岡工⑥浦山が高い位置からﾐﾄﾞﾙｼｭｰﾄを決め、延長戦へともつれ込む。

延長１Ｐ　お互いに決定的な場面なくしのぎ合う。実力均衡するﾛｰｽｺｱの展開に3分間は短い。

延長２Ｐ　2:03、山形工⑤新山のﾐﾄﾞﾙｼｭｰﾄは、ﾃﾞｨﾌｪﾝｽの腕にあたりｺｰｽが変わりｺﾞｰﾙﾗｲﾝを超えた。しかし、ここから福岡工が奮起。1:34福岡工1年生⑫深川幹徳のﾌﾛｰﾀｰｼｭｰﾄが決まる。また同点。ｼｭｰﾄの打ち合いの末、決定弾は福岡工。0:49、④伊藤がGKの位置をよく見てﾐﾄﾞﾙﾚﾝｼﾞからﾊｰﾌﾙｰﾌﾟｼｭｰﾄを決めた。ここにきての冷静なﾌﾟﾚｰが優勝を呼び込んだ。

ｽﾀｰ選手をそろえた山形工であったが、初優勝はならず。福岡工は1997年以来、3回目の優勝を果たした。両ﾁｰﾑとも3年生以外に、1, 2年生の活躍が輝いていた。これからの日本水球界を担う選手が間違いなくこの両ﾁｰﾑから出ることは間違いないであろう。

記 録 者	志水　啓介

山形工　　初優勝ならず
福岡工　　Ｈ5以来、3回目